新制女子國文典

初年級用

東條操著

375.9
To10
資料室

42352
教科書文庫
4
815
42-1937
2000.0
46050

資料室

昭和十二年二月一日
文部省檢定濟
高等女學校國語科用

教科書文庫
4
815
42-1937
2000046050

新制女子國文典

東條操著

初年級用

広島大学図書
2000046050

375.9
To10

廣島大學圖書之印

廣島大學 教 46050 図書

例言

一、本書は昭和十二年改訂要目に準據し、高等女學校初年級用として編纂したものである。

一、文章法は單語篇に先立つ總說に於て其の概略を說き、第四篇において更に之を細說することとした。

一、單語法は第一篇に於て先づ各品詞の概念を與へることとし、更に第二篇・第三篇に於て用言及び助辭を細叙することとした。

一、說明は成るべく歸納的にして簡明ならんことを期した。

一、練習問題は大部分を現行新舊の小學讀本から取つた。

一、第一篇の練習問題はすべて品詞を區切つて出し、それによつて、全品詞の概念を有たないうちに或品詞を摘出せねばなら

ぬといふ不便を避けた。

一、文法上疑義のある問題はすべて之を避け、初學者をして迷はしめないやうに注意した。

一、敬語法は我が國語の一大特長であつて、國民性と密接な關係があるにかゝはらず、近時漸く紊亂に陷らんとするの弊が見えるに鑑み、特に卷尾に附說することとした。

昭和十二年七月

著者識

新制女子國文典

初年級用

目次

總說……一

第一篇　品詞

第一章　名詞……四

第二章　數詞……六

第三章　代名詞……七

第四章　動詞……一一

第五章　形容詞……一三

第六章　形容動詞……一五

第七章　助動詞……一七

第八章　助詞……二〇

第九章　副　詞……二四
第一〇章　接　續　詞……二六
第一一章　感　動　詞……二九
第一二章　接頭語・接尾語……三一
第二篇　用　言
第一章　動詞の活用形……三四
第二章　動詞の活用の種類……三七
活用の識別法……四一
假名遣の識別法……四三
第三章　形容詞の活用……四六
第四章　形容動詞の活用……四八
第五章　動詞・形容詞の音便……五一
動詞の音便……五一
形容詞の音便……五三

第三篇　助　辭
第一章　助動詞の種類・活用・接續……五七
一、動詞の未然形に副ふもの……五八
二、動詞の連用形に副ふもの……六三
三、動詞の終止形に副ふもの……六五
四、體言又は用言の連體形に副ふもの……六六
助動詞相互の接續……六八
第二章　助詞の種類・用法……七一
第一類……七一
第二類……七三
第三類……七四
第四篇　文
第一章　文の成分……七九
第二章　文の成分の位置と省略……八五

敬語法……八九
附表
語の分類表
動詞活用表
形容詞活用表
形容動詞活用表
助動詞活用表

—目次終—

廣島大學圖書之印

新制女子國文典

初年級用

東條操著

總說

私達は女學生です。
櫻が咲く。
春は樂しい。

右の例のやうに、「何が何だ。」「何がどうする。」「何がどんなだ。」といふやうな、一つのまとまつた考を述べたものを、文法上で文といふ。

右の文の中で、「私達は」「櫻が」「春は」のやうに、「何がに當るものを主語といひ、「女學生です」「咲く」「樂しい」のやうに、主語について說明する

文
主語

述語

修飾語
被修飾語

單語（語）

自立語

ものを述語といふ。

美しい花が咲きます。

空は青々と晴れた。

右の文の中の「美しい」「青々と」は、其の下の「花」「晴れた」を「どんな」或は「どんなに」と修飾してゐる。かやうな語を修飾語といひ、其の下の修飾される語を被修飾語といふ。

文はこれを組立ててゐるいくつかの「ことば」に分ける事が出來る。この、文の單位としての一つ一つの「ことば」を、文法上で單語又は語といふ。

單語には自立する語と附屬する語とある。

私達は女學生です。

美しい花が咲きます。

右の文の中の「私達」「女學生」「美しい」「花」「咲き」は自立語であり、「は」

附屬語

活用語

品詞

「です」「が」「ます」は附屬語である。附屬語は常に自立語と共に使はれる。また決して文の最初には現はれない。

單語には活用する語と活用しない語とある。

櫻が咲く。

春は樂しい。

右の文の中の「咲く」は「咲かない」「咲きます」「咲け」など、場合によつて語の形が變化する。「樂しい」も「樂しく」「樂しければ」と語の形が變化する。かやうな語を活用語といふ。「櫻」「が」「春」「は」などは語の形の變化する事がない。

單語をかやうな文法上の性質の相違によつて分けると左の十一種となる。その各々を品詞といふ。

名詞　數詞　代名詞　動詞　形容詞　形容動詞　助動詞

助詞　副詞　接續詞　感動詞

名詞
固有名詞

第一篇　品詞

第一章　名詞

一　春の花は秋の紅葉よりも美しい。
二　勉強は成功の母である。
三　エヂソンは米國の人ですが、また世界の恩人です。

右の例のやうに、事物の名をあらはす單語を名詞といふ。その中で、二重線を施した語のやうに、人名・地名等をあらはすものを固有名詞といふ。

練習

次の文中から名詞を選び出し、その中、固有名詞は特に指摘してごらんなさい。

1　青、綠、紅、紫、目のさめるやうに美しい魚の群が珊瑚の林や海藻の間をぬつて泳いで行く。

2　「必要は發明の母」である。人は生活の必要から發火法を工夫し、燃料を研究し、熱と光とをあらゆる方面に利用することを考へて來た。

3　其の後宣長は絶えず文通して眞淵の敎を受け、師弟の關係はいよいよ親密の度を加へた。

4　國旗は實に國家を代表する標識であつて、その徽章色彩にはそれ〴〵深い意義がある。

5　連絡船は朝早く釜山に着いた。京城行の汽車が目の前に待つてゐる。

第二章　數詞

一　八つは四つの二倍です。

二　蜜柑十五個あつたものを、六個食べると、いくつ殘るか。

三　四十人中、八番の成績で入學した。

四　一寸の虫にも五分の魂がある。

右の例のやうに、事物の數量又は順序をあらはす單語を數詞といふ。

練習

次の文中から數詞をお選びなさい。

1　團員は午前七時八幡神社の境内に集つた。總員三十二人が四組に分れて、それぞれ仕事の持場に向つた。

2　上海は支那第一の貿易場で、百餘萬の人口を有する大都會である。

3　四回目に、兄ウィルバーが乘つた時は、非常に調子よく飛んで、五十九秒、二百六十米といふ好成績を收めました。

第三章　代名詞

一　あなたもいらつしやい。私も參りますから。

二　これよりあれがいい。

三　ここはどこでせう。

右の例のやうに、人や事物等の名をいふ代りに、指していふ單語を代名詞といふ。人に用ひるものを人代名詞といひ、事物・場所・方向をあらはすものを指示代名詞といふ。

人代名詞の例

自稱	對稱	他稱	不定稱
わたくし わたし	あなた おまへ	このかた そのかた あのかた あれ	どのかた どなた だれ

指示代名詞の例

	近稱	中稱	遠稱	不定稱
事物	これ (こ)	それ (そ)	あれ (あ)	なに どれ (ど)
場所	こ ここ ここら	そこ そこら	あそこ あそこら	どこ どこら
方向	こつち こちら	そつち そちら	あつち あちら	どつち どちら

練習

一、次の文中から代名詞を選び出し、その種類と稱とをお述べなさい。

1 あなたはどなたですか。

2 あれが北上川だ。汽車はここからあの川について北へ北へと走るのだ。

3 雀の子そこのけそこのけお馬が通る。

4 これこそ私達がまつてゐた命令だつた。

5 どこか其の邊の空に美しい七つの星を探すことにしませう。これはすぐ見つかります。

6 暑い日盛に、あつちでも、こつちでも、田の草を取つてゐる。

二、自稱と對稱との人代名詞中、目上に對して用ひるものをお擧

げなさい。

名詞・數詞・代名詞を總稱して體言といふ。體言は文の主語となり得る主要な單語である。

體言の復習

次の文中から名詞・數詞・代名詞をお選びなさい。

1 北斗七星が見つかつたら、其の七つの中の、下の端に當る二つの星に注意しませう。さうして、かりに此の二つの星を結ぶ線を引き、それをなほ右の方へのばして見ませう。

2 其の最初といへば、ライト兄弟の苦心に成つた十二秒から五十九秒までの飛行で、これが實に飛行機における人類最初の輝かしい成功記錄であつたのです。

3 苦難の生涯は、三十四歳で終を告げた。甲部川の水は、此のうらみも知らぬ顔に、今もいういうと流れてゐる。あの淡い三日月の影を浮かべながら。

第四章 動詞

一 風が吹く、花が散る、春が暮れる。

二 本を讀み、字を習ふ。

三 この奥に梅林がある。

右の例のやうに、事物の動作をあらはす單語を動詞といふ。あるといふ存在をあらはす單語も動詞の一種である。

「何がどうする。」といふ文の述語は動詞である。

練習

次の文中から動詞をお選びなさい。

1 時計師は早速ピンセットでねぢをはさみ上げて、大事さうにもとのふたガラスの中へ入れた。

2 漁夫はめい〳〵手に一ちやうづつの鈎を持ち、狂ひ廻るまぐろを引つかけ、はねるはずみを利用して船中に引上げる。

3 「人は火を用ひる動物」といはれてゐるやうに、火を使用するのは人類ばかりで、他の動物には見られない所である。

4 驛員の顏が見えたと思ふと消え、驛の花壇の赤いカンナの花が後へ走つて行く。

5 東海道の松並木が見える。道路が十文字に交る。こゝかしこに村落や町が點在する。鐵道が見える。電車が走る。自動車が

飛ぶ。人影が動く。

6 再び海へ出た。右手に築港があり、汽船が數隻かゝつてゐる。名古屋だと思ふ途端、プロペラが止つて、後は空中滑走である。機は輕く地上ををどりながら滑る。

第五章　形容詞

一 バスケットボールは面白い。

二 美しい花園に白い薔薇が咲いてゐる。

三 夜は暗く、月もない。

右の例のやうに、事物の性質・狀態をあらはす單語で、言切る時の形の終がいとなるものを形容詞といふ。

あるの反對語のないは形容詞である。

形容詞は「何がどんなだ。」といふ文の述語になり得る單語である。

練習

次の文中から形容詞をお選びなさい。

1 實の中にはかたい殼があつて、其の內がはに白い肉のやうなものがあります。

2 寶玉をちりばめたやうなかはいい目、紅をさしたかと思はれるやさしいくちばし、美しい羽毛に包まれた圓い胸、鳩は愛らしいものである。

3 光の強い部分もあれば弱い部分もあり、又所々に黑點といつて黑く見える所もある。

4 斜面などに植ゑた木は低い處にあるもの程早く大きくなつて、こすゑの差が段々少くなつて行くのも面白い。

5 うるはしい眞玉白玉、にほひのよい木の實、草の實、うづだかい積荷の中に、海山の寶を載せて、わが船は靜かに歸る、懷かしい故郷の港。

第六章　形容動詞

一　海が靜かだ。

二　此のけなげな言葉は遂に父を動かした。

右の例のやうに、形容詞でなくて、「何がどんなだ」といふ文の述語となつたり、又體言を「どんな」と形容したりする語がある。これを**形容動詞**といふ。

以上の說明でもわかるやうに、「何がどんなだ」といふ文の述語は形容詞又は形容動詞であらはすのが普通である。

練習

次の文中から形容動詞をお選びなさい。

1 晴れやかな朝の海に、かもめが飛ぶ。

2 赤い大きな夕日が、今、西の遠いく〳〵地平線に落ちて行くところだ。

3 天井の高い廣い室はしんとして靜かだ。

動詞・形容詞・形容動詞を總稱して**用言**といふ。用言は文の述語となり得る主要な單語である。

用言の復習

次の文中から動詞・形容詞・形容動詞をお選びなさい。

1 汽車は、すさまじい音を立てて、漢江の鐵橋を渡つた。江岸の建物が、強い夏の光を受けてきらく〳〵と光つてゐる。

2 廣い道路が、鐵道と並んで通つてゐる所が多い。並木がよく植込まれてゐる。荷物を積んだ小さい朝鮮馬が行く並木の日かげに、大きい包を頭の上にのせた女が、休んで汗をふいてゐる。

3 間もなく當直將校から威勢のよい號令がかゝる。水兵はかひ〳〵しくズボンをまくり上げ、身輕な姿になつて、分隊毎に甲板洗を始める。

4 兄は、改つた口調で言つた。「甚次郎、どうかりつぱな武士になり、家の名をあげてくれ。」

第七章　助動詞

一　去年は東京に行つた。

二　今年も東京に行かう。

三　母に譽められる。

四　女中に庭を掃かせる。

右の例のやうに、主に動詞の下に副うて、その叙述を助ける單語を助動詞といふ。

一　あなたは褒められるでせう。

二　庭を掃かせました。

右の例のやうに、助動詞は重ねて用ひることがある。

一　明日は雨だ(です)。

二　一番早いのは私だ(です)。

右の例のやうに、何が何だ。といふ文は、述語が體言とだ・です・とから成るのが普通である。だ・です・も助動詞の一種である。

練習

一、次の文中から助動詞をお選びなさい。

1　先生が來られた。

2　叔父さんは東京へ行かれました。

3　この鈎には掛けられない。

4　こゝからは飛ばれまい。

5　私は本を買ひたい。

6　どうやら雨になるらしい。

7　ロスアンゼルスは南國的な都市です。

8　飼養所を移動し、其處を見覺えさせて飛歸らせる事も出來ます。

9　此の有樣を見てフイリツプといふ醫師が、一命をなげうつ

ても王を助けようと決心した。

10 わき目もふらず働くので、店はだん〳〵繁昌して、十年もたたぬ中に、町でも屈指の財産家となつた。さうして人々に推されて、町の銀行の頭取になつた。

二、例文と練習題との中の助動詞の種類を、一所に書き集めてごらんなさい。

第八章　助詞

一　私は妹をつれて學校に行きます。

二　雨が降るけれども、學校は休むな。

三　母も參りませうが、私も參ります。

四　ようこそいらつしやいました。

右の例のやうに、主に體言・用言・助動詞などの下に副うて、他の語句

との關係を示したり、又はある意味を添へる單語を助詞といふ。

一　遠足には行かない。

二　口にさへも出さない。

右の例のやうに、助詞は重ねて用ひることがある。

練習

一、次の文中から助詞をお選びなさい。

1 多くの動物を注意して見ると、いろ〳〵珍しい事があるのに氣がつく。

2 東京から此所までは四百五十七哩もある。

3 今朝だけはあなたより早く來ました。

4 打返す磯波にまき込まれたかと思へば、忽ち大波にゆり上げゆり下げられ沖へ沖へとつき進む。

5 數十人の水兵が、洗刷毛で甲板をこすりながら、頭を並べて進んで行く。

6 模型飛行機が飛ぶのですから、其の大きい物を作りさへすれば、きつと人間も乘つて飛べるに違ひありません。

7 雨が降るのにお氣の毒ですが私とおいで下さい。

二、例文と練習題との中の助詞の一音のものと二音のものとを書き集めてごらんなさい。

助動詞と助詞とを總稱して**助辭**といふ。文には必要な單語であるが、獨立する力がなく、他の單語の下に用ひられる附屬語である。

助辭の復習

次の文中から助動詞・助詞をお選びなさい。

1 ハワイから出した手紙は、見たでせうね。

2 こゝは、アメリカ合衆國の裏門ともいはれる重要な場所ですから、港や町のにぎやかなことはいふまでもありませんが、又眺望の好いことも有名です。

3 親子は總掛りで探し始めた。ねぎは、「こゝにゐます。」と叫びたくてたまらない。三人はさん〳〵探し廻つたが、見つからないので、がつかりした。

4 日本からオーストラリヤまでは、一萬粁以上もありますが、つばめは決して自分の國を忘れません。日本に春がくると思へば、もう彼等は北をさして進むのです。其の小さい胸には、青々と植ゑつけられた夏の稻田を思ひ浮かべてゐるでせう。

第九章　副詞

一　雨が靜かに降る。
二　ひらりと飛び下りる。
三　此の本はなか〳〵面白い。
四　丁寧に說明する。

右の例のやうに、主に用言の上に副うて、そのあらはす動作や性質などを、どんなにと詳しく修飾していふ單語を副詞といふ。時には「大變丁寧に」のやうに副詞を修飾することもあり、「一體これはなんだ。」のやうに文を修飾することもある。

文中の用言の修飾語は副詞からなる場合が多い。

練習

一、次の文中から副詞を選び出し、それが何を修飾してゐるかをいつてごらんなさい。

1　二人は戸外にたたずんでしばらく耳をすましてゐたがやがてピアノの音がはたと止んだ。

2　ベートーベンの兩眼は異樣に輝いて、彼の身には俄に何者かが乘移つたやうだ。

3　彼は一夜を靜坐してひたすら思をこらしてゐると、やがて一點の明星がきらめいて、夜はほの〴〵と明けそめた。

4　老僧の終始一貫した根氣は、遂に村の人々を恥ぢさせたものか仕事を助ける者がまたぽつ〳〵と出來て來た。

5　上海は支那の各地との取引にもきはめて便利だから、港内には常に數百隻の船が集つてゐて、頗る壯觀である。

6　高度がぐん〳〵落ちて、町々がはつきり見える。

二、次の文の用言の上に適當な副詞を補つてごらんなさい。

雨が……降る。　蓮の花は……美しい。

老人が……歩む。　蛙が……鳴く。

三、「靜かに」「ひらりと」のやうな「……に」「……と」といふ形及び「なかなか」のやうな疊語の副詞を五つづつお擧げなさい。

第一〇章　接續詞

一　山また山を分けてゆく。

二　今日は風がひどい。だから船は出ないでせう。

三　父も喜んだ、子供も喜んだ。但し、一番喜んだのはねぢであつた。

右の例のやうに、語句や文を接續する單語を接續詞といふ。

(イ)私は行つたけれど、會へなかつた。

(ロ)私は行つた。けれど會へなかつた。

右の(イ)のやうにけれどで上の文から下の文へ續ける場合は助詞であるが、(ロ)のやうに上の文を一旦切つて、けれどと改めて下の文を起す時は接續詞である。

練習

一、次の文中から接續詞をお選びなさい。

1　有難うございます。しかし誠に粗末なピアノで、それに樂譜もございませんが。

2　日光が店一ぱいにさし込んで來た。するとねぢが其の光線を受けてぴかりと光つた。

3　國民の生活をおびやかすやうな危機は絶無であり、國内はおほむね平和であつた。隨つて國民は國の誇を傷つけられた

ことがなく、又其の誇を永久に持續しようとする心掛けも出來た。

4 底の水道から水がわき出て、船は次第に高く浮上る。と、上手の水門が開いて、船は次の箱の中へはいる。

5 各部にそれ〴〵掛の記者又は技術家があつて、或は出て材料を取り、或は社内にゐて、編輯事務にたづさはる。

6 眞中邊より少し低い所に、かなり大きな星が一つ見えるのがそれです。もつとも其の高さは見る場所によつて幾分違ひます。

二、次の文を接續詞を加へてつないでごらんなさい。又、接續詞を用ひないで、助詞でつないでごらんなさい。

1 雨が降る……私は行きます。

2 雨が降る……私は行きません。

第二章　感動詞

一　おやお珍しい。

二　さて〴〵殘念だ。

三　おい早く來ないか。はい、只今參ります。

四　さあ行かう。

五　あゝ、何といふ情ない身の上であらう。

右の例のやうに、感動の意や、呼びかけ・應答をあらはす單語を感動詞といふ。

「まあ、いゝ月ですねえ。」「あゝ困つたなあ」のまあ・あゝは感動詞であるが、ねえ・なあのやうに文の終に來るものは感動の意味をあらはす助詞であつて感動詞ではない。

練習

次の文中から感動詞をお選びなさい。

1 あゝ、面白かつた。おや、北斗七星が半分杉林にかくれてしまつた。

2 よくこんなに早く出來ましたね。どれ、私もお茶を一つ御ちそうになりませう。

3 「やあ、すつかり變つた。」「うん、これが四十日間の汗のたまものさ。」

4 力藏さん、まあ、一服やつてから始めなさい。

5 やれ打つなはへが手をする足をする。

第一二章　接頭語　接尾語

接頭語

單獨には用をなさないで、他の語の上について語の一部分となるものを接頭語といふ。

み位　お屋敷　御先祖　第二

生やさしい　ものさびしい　か弱い

さし上げる　とり扱ふ

右のさし・とり等は本來は動詞であるが、そのもとの意味を失つて接頭語となつたものである。

接尾語

單獨には用をなさないで、他の語の下について、語の一部分とな

るものを接尾語といふ。

奥さま　花子さん　子供ら　親たち　一番

男らしい　面白がる　涼みがてら

練習

次の文中から接頭語・接尾語をお選びなさい。

1 ねえさんのお友だちの岡田さんが今日旅行からお歸りになりました。

2 父の顏には滿足らしい笑みが浮んだ。

3 歸りに散歩がてら町を歩いて見た。

4 明日は遠足だといふので、みんなはこをどりしてうれしがる。

5 妹が第一番に驅け出しました。

復習

次の文中の各單語の品詞名をいつてごらんなさい。

1 目じるしの大けやきの所まで來た時、急にかん高い音を立てて、美しい小鳥が二三羽飛出した。すると木のうろから、栗鼠が一匹、顏を出したが、僕の姿を見ると、太い尾をちらりと見せて、急にまた穴にかくれた。

2 社會的生活をするのが人の本能であるとすれば、人がその住むところの社會や國家を愛するのも、亦本能であるといはれよう。

3 裁判の目的は、決して人を爭はせ、又は人を罰することではない。此の世を不道理や罪惡の行はれない、平和な、正しい世の中にするのが其の目的である。

第二篇　用言

第一章　動詞の活用形

書
- か…う（第一形）
- き…始める（第二形）
- く（第三形）
- く…人（第四形）
- け…ば（第五形）
- け（第六形）
- け…よう
- け…取る
- ける

起
- き…よう
- き…上る
- きる
- きる…人
- きれ…ば
- きよ(ろ)
- 來…よう
- 來…にくい
- 來る

受（來）

- ける…時
- けれ…ば
- けよ(ろ)
- 爲…ぬ(爲…よう)
- 爲…直す
- 爲る
- 爲る…こと
- 爲れ…ば
- 爲よ(爲ろ)

（爲）

- 來る…時分
- 來れ…ば
- 來い

右の例を見ると、次のことがわかる。

一　動詞は形が色々に變化する。

二　動詞の形の變化は五十音圖の同行の間に起る。

三　多くの動詞には變化する部分と變化しない部分とがある。

活用　動詞の形の變化することを**活用**といひ、變化する部分と變化しない部分とがある語では、變化しない部分を**語幹**といひ、變化する部分を**語尾**といふ。

動詞の活用の各形は、その下に續く語によつて色々の働きをするが、その主な働きによつて、次のやうな名がある。

第一形　この形は、助動詞のう・ようが副うて、動作がまだ成立しない意味をあらはす場合が多いから、**未然形**といふ。

第二形　この形は、用言に連なる場合が多いから、**連用形**といふ。

第三形　この形は、文を終止する爲に用ひられる場合が多いから、**終止形**といふ。

第四形　この形は、體言に連なる場合が多いから、**連體形**といふ。

第五形　この形は、助詞のばが副うて、假定の意味をあらはす場合が多いから、**假定形**といふ。

第六形　この形は、命令する爲に用ひられるから、**命令形**といふ。

以上六つの形を**活用形**といふ。

注意　口語では終止形と連體形とは常に同じ形である。

練習

次の動詞を活用させて御覽なさい。

行く　落ちる　棄てる　煮る　有る　勉強する　喜ぶ　あわてる

達する　死ぬ

第二章　動詞の活用の種類

四段活用

語幹／語尾	未然	連用	終止	連體	假定	命令
有	ら	り	る	る	れ	れ
死	な	に	ぬ	ぬ	ね	ね
書	か	き	く	く	け	け

右の例のやうに、五十音圖のア・イ・ウ・エの四段に活用するものを四段活用といふ。

上一段活用

語幹／語尾	未然	連用	終止	連體	假定	命令
落	ち	ち	ちる	ちる	ちれ	ちよ ちろ
(射)	い	い	いる	いる	いれ	いよ いろ

右の例のやうに、五十音圖のイ段にだけ活用し、終止形・連體形にる、假定形にれ、命令形によ(ろ)が副ふものを上一段活用といふ。

下一段活用

語幹／語尾	未然	連用	終止	連體	假定	命令
棄	て	て	てる	てる	てれ	てよ てろ
教	へ	へ	へる	へる	へれ	へよ へろ

右の例のやうに、五十音圖のエ段にだけ活用し、終止形・連體形にる、假定形にれ、命令形によ(ろ)が副ふものを下一段活用といふ。

以上、四段・上一段・下一段の三活用を正格活用といふ。

カ行變格活用

語尾／語幹	未然	連用	終止	連體	假定	命令
(來)	こ	き	くる	くる	くれ	こい

來るといふ語は右のやうに活用する。これをカ行變格活用(略してカ變)といふ。

カ變の動詞は來るといふ一語だけである。

サ行變格活用

語尾／語幹	未然	連用	終止	連體	假定	命令
(爲)	せ し	し	する	する	すれ	せよ しろ

爲るといふ語は右のやうに活用する。これをサ行變格活用(略してサ變)といふ。

サ變の動詞は本來爲るといふ一語だけであるが、此の語が他の語について多くのサ變の動詞が出來る。

一 國語にするのついたものの例

噂する　全うする　輕んずる

二 漢語にするのついたものの例

勉强する　遠足する　議論する

報ずる　感ずる　命ずる

以上、カ變・サ變の二活用を變格活用といふ。

活用の識別法

語數に限りのある活用

カ變　來る

サ變　爲る　漢語その他にするがついたもの。

右の外は打消のぬが

四　段には　ア段の音に副ふ。　書か…ぬ

上一段には　イ段の音に副ふ。　落ち…ぬ

下一段には　エ段の音に副ふ。　教へ…ぬ

假名遣の識別法

一、ア行・ハ行・ヤ行・ワ行の識別

ア行　得る……下一段

ワ行　居る　率ゐる……上一段

植ゑる　飢ゑる　据ゑる……下一段

ヤ行　射る　鑄る　老いる　悔いる　報いる…上一段

甘える　癒える　怯える　覺える

消える　聞える　越える　肥える

凍える　冴える　榮える　聳える

絶える　費える　潰える　痿える……下一段

煮える　生える　映える　冷える

殖える　吼える　見える　燃える

萌える　悶える

右の外はすべてハ行と思へばよい。

二、ザ行・ダ行の識別

ザ行　(イ)混ぜる……下一段

(ロ)他語にするがついたサ變の動詞の中の報ずる・感ずる・命ずる等の類

右の外はすべてダ行と思へばよい。

練習

一、動詞の活用のしかたには幾種類ありますか。

二、次の文中から動詞を選び出し、その活用の種類をいつてごらんなさい。

1 王は間もなく健康を回復して、再び其の英姿を陣頭にあらはす事が出來た。

2 なれない私は、大丈夫といはれても、馬のそばを通るのが恐ろしいやうな氣がする。

3 米國が此の運河を造るに成功したのは、主として最新の學理を應用したからである。

4 今年伐るはずのは、お父さんの子供の時植ゑたのだといふが、もう幹のまはりの三尺もあるものが大分見える。

5 加硫法とは、ゴムに硫黄をまぜる事で、かうするとゴムが非常に彈力を增して來る。

6 釋迦は世を救ふ手始として先づかの五人の友をたづねた。かつて釋迦を見棄てた彼等も、其の慈悲圓滿の姿を見ては、思はず其の前にひざまづかざるを

得なかつた。

三、次の動詞を活用の種類に分類して、活用表をお作りなさい。

押す　着る　延びる　流れる　告げる　來る　死ぬ　運動する　漕ぐ

四、次の文中の動詞の假名遣の誤をお正しなさい。

1 眺望臺で眺めると、道を往來している人間や自動車などは、まるで蟻のはうやうに見ゑる。

2 調子のよい蜜柑採歌がすみきつた晩秋の空氣をふるわして、何處からともなくのどかに聞へて來る。

3 太平洋から大西洋に通ずるパナマ運河は途中でガツン湖という人造湖を横ぎる。湖上に點々と散在している島々は、もと此處に聳へていた山々である。

4 近年は作物も改良せられ、桑を植えて蠶を飼う者が多い。

5 此の金は、飢えた人々の救助に用いられるのである。

第三章　形容詞の活用

高
- く……聳える（連用）
- い（終止）
- い……山（連體）
- けれ……ば（假定）

美
- しく……咲く
- しい
- しい……花
- しけれ……ば

右の例のやうに、形容詞には、く・い・い・けれと活用するものと、しく・しい・しい・しけれと活用するものとがある。前者をク活用といひ、後者をシク活用といふ。

連用形は用言に連なる形である。

終止形は文を終止する形である。

連體形は體言に連なる形である。

假定形は助詞のばが副うて假定の意味をあらはす形である。

ク活用
シク活用

形容詞の活用には未然形と命令形とはない。

語幹＼語尾	未然	連用	終止	連體	假定	命令
ク活用 高		く	い	い	けれ	
シク活用 美		しく	しい	しい	しけれ	

練習

一、次の文中から形容詞を選び出し、何活用かをいつてごらんなさい。

1　にほひのよいのや、色の美しいのや、形のかはいらしいのや、どれを見ても、一枝髪にさしてみたい。

2　どうだ、美しいだらう。此の溫室は南を受けてゐる上に、十分熱い湯が通つてゐるから、こんなに早く咲くのだ。一度此の中にはいると、また寒い處へ出る

のがいやになるね。

3 月のさえた冬の夜、友人と二人町へ散歩に出て、薄暗い小路を通り、或小さいみすぼらしい家の前まで來ると、中からピアノの音が聞える。

4 さびしい庭に咲きのこつた菊の花のたかいにほひは、神のたふとい御心なのか。

5 青空はどこまでも高い。細長い煙突やアンテナが、背のびしてゐる。

6 おなつかしい叔父様からのおたよりほどうれしいものは又とない。

7 何といふ美しい濃い青さであらう。

三、シク活用の形容詞を思ひ出すだけいつてごらんなさい。

第四章　形容動詞の活用

だら…う（未然）　でせ…う（未然）
だつ…た（連用）　でし…た（連用）
静か

静か
だ（終止）　です（終止）
な…人（連體）
なら…（ば）（假定）
から…う（未然）
かつ…た（連用）
高

未然形は助動詞うに連なる形である。

連用形は助動詞たに連なる形である。

終止形は文を終止する形である。

連體形は體言に連なる形である。

假定形は助詞のばに副ひ又はそれだけで假定の意味をあらはす形である。

形容動詞にはだら・だつ・だ・な・ならと活用するものと、でせ・でし・ですと活用するものとある。後者は丁寧にいふ場合に用ひる。外に、形

容動詞の一種にから・かつと活用するものがある。もと形容詞の連用形にあるといふ動詞が融合したものである。これは未然形・連用形だけが使はれる。

語幹＼語尾	未然	連用	終止	連體	假定	命令
静か	だらでせ	だつでし	だです	な	なら	
高	から	かつ				

練習

次の文中から形容動詞を選び出し、その活用をいつてごらんなさい。

1 美しい空である。はなやかな空である。

2 明日は海も穏かでせう。

3 あの時くらゐ恥しかつたことはない。

4 よからうがわるからうが、委細構はず斷行する人だ。

5 そんなことはなからうと思ふが。

6 若い頃は生活も隨分華やかだつたらしい。

7 そんなに體が丈夫なら、何も心配はない。

8 歸りは、村まで下りきりの愉快な道だ。

第五章　動詞・形容詞の音便

動詞の音便

動詞が助詞て・助動詞たに續く場合には連用形から連なるのであるが、四段動詞では連用形に音の變化が起る。これを音便といふ。

(イ) **イ音便**　四段のき・ぎがいとなる場合

咲き　咲いて
咲いた

漕ぎ　漕いで
漕いだ

行きて・行きたは行つて・行つたのやうに促音便となる。

(ロ)**ウ音便**　四段のひがうとなる場合

買ひ　買うて
買うた

(ハ)**促音便**　四段のち・ひ・りが促音つとなる場合

打ち　打つて
打つた

歌ひ　歌つて
歌つた

有り　有つて
有つた

(ニ)**撥音便**　四段のに・び・みが撥音んとなる場合

死に　死んで
死んだ

飛び　飛んで
飛んだ

汲み　汲んで
汲んだ

ぎ・に・び・みが音便になる時は次に來るて・たは濁音にかはる。

形容詞の音便

形容詞の連用形はございます存じますの前で音の變化が起る。

ウ音便　く・しくがう・しうとなる。

お暑う(く)ございます。おなつかしう(しく)存じます。

練習

一、次の文中の音便について、その種類をいつてごらんなさい。

1 ボートはかの難破船にたどりついた。生殘つた船員はみな涙を流して喜んだ。

2 「うん、これが四十日間の汗のたまものさ。」といつて、かついで來たつるはしを下へ置いた。

3 明けましておめでたうございます。

4 人の一生は重荷を負うて遠い道を行くやうなものである。

5 出して置いたねぢの無いのに氣がついた。

二、次の文中の誤を正し、その理由をいつてごらんなさい。

1 これまで說ひた敎が私の命である。

2 先生に問ふて見るのが一番よいと思ふ。

3 志願者は年を追ふて增加して來ました。

4 掛りの人々は、その人をあやしい者とにらむで取調べた。

5 此の塀に沿ふて右に曲つた方が近ふございます。

6 此の小傳令使は、其の夜どこで休むだことか、翌日になつて、やうやく大石橋の自分の旅舍にたどり着ひたのである。

復習

次の文中から用言を選び出し、その活用をお示しなさい。

1 庭に敷きつめたむしろの上に、黃色い麥の穗が一面に廣げられて、まぶしいやうな夏の日にかゞやいてゐる。

2 汽車は野を過ぎ山を越えて進む。北上川はまだをり〳〵見えるが、いよ〳〵せまくなつて、とう〳〵谷川になつてしまつた。

3 三四歲の子供でも、馬の腹の下を自由にくゞつて歩きます。馬も、げつたりかみついたりするやうな事は決してしません。

4 暑い日がやつと暮れても、よひの間は家の中がむつとして、柱も、壁も、さはるとどうやら熱氣を吐いてゐる。二階へ上つてみても、さして涼しい風はない。

5 圓く廣がる水の輪が、いくつも出ては消えるたび、水にうつつた三日月が、ゆらゆら見えたりかくれたりする。

6 もう何といつても秋である。よし晝間はどんなに暑からうとも、日光はかすかに黄色味を帶びて、壁や塀の強い反射が幾分やはらいで見える。

7 機内の席に着くと、小さなとびらが外からぱんとしめられる。何のことはない、旅客機といふものは、自動車を細長くして、それに大きな翼を附けたものと思へばよい。

第三篇　助　辭

第一章　助動詞の種類・活用・接續

助動詞には動詞や形容詞と同じやうに活用がある。活用形の名前も同じである。

譽め
- られ……よう（未然）
- られ……ます（連用）
- られる（終止）
- られる……時（連體）
- られれ……ば（假定）
- られよ（ろ）（命令）

讀め
- なく……なる（連用）
- ない（終止）
- ない……本（連體）
- なけれ……ば（假定）

助動詞には、動詞の未然形に副ふもの、連用形に副ふもの、終止形に

副ふものの外に、體言及び用言の連體形に副ふものなどもある。

一、動詞の**未然形**に副ふもの

(イ)**受身**の助動詞　**れる　られる**

妹が父に叱られる。

姉は母に譽められる。

語	未然	連用	終止	連體	假定	命令
れる	れ	れ	れる	れる	れれ	れよ れろ
られる	られ	られ	られる	られる	られれ	られよ られろ

(ロ)**可能**の助動詞　**れる　られる**

正午までには頂上に登られる。

夕方までには下りられる。

活用は大體受身と同じであるが、命令形がない。

(ハ)**使役**の助動詞　**せる　させる**

兄に庭をはかせる。

妹に塵を棄てさせる。

(ニ)**尊敬**の助動詞　**れる　られる**

父上が歸られる。

知事が上京せられる。

語	未然	連用	終止	連體	假定	命令
せる	せ	せ	せる	せる	せれ	せよ せろ
させる	させ	させ	させる	させる	させれ	させよ させろ

活用は可能の助動詞と同じである。

一層改まつた敬語としては、せる・させるとられるとを重ねて

殿下には大會に臨ませられる。

妃殿下には記念樹を植ゑさせられる。

などといふ事もある。

我が國には敬語のいひ方が發達してゐるので、以上の助動詞の外に、になる・なさる等を助動詞のやうに用ひて尊敬の意味をあらはす事が多い。

朝早くお目ざめになる。

洗面場でお顔をお洗ひなさる。

右のやうに助動詞に準じて用ひられるものを**準助動詞**といふ。

(ホ) **豫想の助動詞　う　よう**

汽車は間もなく着かう。

準助動詞
豫想

間もなく到着しよう。

又決意をあらはす事もある。

私も行かう。

今度は大いに勉強しよう。

このう・ようの活用は終止形だけで、他の活用形はない。

ようはサ變の動詞ではしに副うて「しよう」といふ。

四段活用の動詞にはれる・せる・うが副ひ、その他の動詞にはられる・させる・ようが副ふ事は上の通りである。又られる・させるがサ變の動詞に副ふ時には、活用形のせと助動詞とが約まつてされる・させるといふ事が多い。

噂される。

介抱させる。

掃除させる。

(ヘ)打消の助動詞　ぬ(ん)　ない

私は英語は出來ぬ(ん)。

私には漢文は讀めない。

語	未然	連用	終止	連體	假定	命令
ぬ(ん)		ず	ぬ(ん)	ぬ(ん)	ね	
ない		なく	ない	ない	なけれ	

サ變の動詞では「せぬ」「しない」のやうに、ぬはせに、ないはしに副ふ。

ぬ、ないは動詞あるには接續しない。

ないの連用形なくにあるが續くと、「なからう」「なかつた」などの形が出來る。

次のやうな、形容詞の下に副ふないは、助動詞ではなく準助動詞で

ある。

その本は面白くない。

二、動詞の連用形に副ふもの

(イ)時の助動詞　た

もう作文を書いたらう。　(未然)

字を書いたり消したり、　(連用)

作文を書いた。　(終止)

書いたものを粗末にするな。(連體)

書いたらお見せなさい。　(假定)

語	未然	連用	終止	連體	假定	命令
た	たら	たり	た	た	たら	

たは音便で「讀んだ」のやうにだとなることがある。

鳥が鳴いてゐる。

てゐるは時を示す準助動詞である。

(ロ)希望の助動詞　たい　たがる

首尾よく合格したい。

とかく遊びたがる。

語	未然	連用	終止	連體	假定	命令
たい		たく	たい	たい	たければ	
たがる	たがら	たがり	たがる	たがる	たがれば	

(ハ)丁寧の助動詞　ます

花が咲いて居ります。

語	未然	連用	終止	連體	假定	命令
ます	ませ	まし	ます	ます	ますれば	ませ まし

ますは話の相手方に對して物を丁寧にいふ言葉である。

又なさる・いたす・申す・ござる等に副へて多く用ひる。

ごゆつくりなさいませ(まし)。

もうおいとまいたします。

面白うございます。

勉強していらつしやいます。

三、動詞の終止形に副ふもの

推量の助動詞　らしい　まい

明日は晴れるらしい。

とても間に合ふまい。

語	未然	連用	終止	連體	假定	命令
らしい		らしく	らしい	らしい		
まい			まい			

らしいは明日は雨らしいのやうに體言の下にも副ふ。

まいは打消の推量である。四段動詞の終止形に副ふが、一段カ變には未然形、サ變には連用形に副ふのが普通である。

まいは又打消の決意をあらはすことがある。

もう決して行くまい。

四、體言又は用言の連體形に副ふもの

指定の助動詞　だ　です

明日はよい天氣だらう(でせう)。(未然)

昨日はよい天氣だつた(でした)。(連用)

今日はよい天氣だ(です)。(終止)

若しよい天氣なら、(假定)

用言に副ふ時には、連用形・終止形の上にのをはさむ。

私が行くのだつたらうれしい。

多は中々寒いのです。

語	未然	連用	終止	連體	假定	命令
だ	だら	だつ	だ		なら	
です	でせ	でし	です			

だの代りに、場合によつてであるを用ひる。であるは準助動詞で

ある。

起床時刻は六時である。

やうだ・やうです・さうだ・さうですはだ・ですとやう・さうとから成る準助動詞である。

今夜はまるで星が降るやうだ。

月の光で晝のやうです。

雨でも降りさうだ。

明日はお天氣ださうです。

やうだはやうな・やうにとも活用し、さうだはさうな・さうにとも活用する。

助動詞相互の接續

助動詞相互の接續關係も、大體動詞との接續關係に似てゐる。

即ち、大體動詞の未然形に副ふ助動詞は助動詞にも未然形に副ひ、動詞の連用形に副ふ助動詞は助動詞にも連用形に副ふ。

あの方はもう卒業せられました。

練習

一、次の文中から助動詞を選び出し、その種類をお述べなさい。

1 其の壯觀はとても筆や口にはつくされません。

2 右にあるのがアメリカ瀧、左にあるのがカナダ瀧で、此の二つを合せてナイヤガラの瀧といふのです。

3 「今年ほど水の都合のよかつた事はない。」とおとうさんが喜んでいらつしやいます。

4 社長さんは餘程の年よりらしいが元氣な方です。

5 あそこに、かなり大きい星があるだらう。あれが今話した北極星だ。

6 命を捨ててかゝつたら、救へないことはありますまい。

7 鳩に手紙を運ばせるには、足にアルミニウムかセルロイドの細いくだを附け、又は胸に袋を掛けさせて、其の中に入れるのです。

8 お知らせしたい事はまだいろ〳〵ありますが、大分長くなりましたから、今日は此のくらゐにして置きます。

9 大分、人が集つてゐるやうだから私も行つて見よう。

10 今日は東京の伯父さんが來られる筈だ。

二、次の文の誤をお正しなさい。

1 はいつてみやう。さうして一曲ひいてやらふ。

2 男の子は指先でそれをつまもうとしたが、餘り小さいのでつまめない。

3 私は行ほうと思つたことを行ひ盡し、語ろうと思つた事を語り盡した。

4 市中の混亂は蜂の巣を突いたようなさわぎである。

5 せつかく始めた學校通ひも、僅か一年足らづで止めねばならなくなつた。し

かし本を讀みたひといふ心は少しも變らなかつた。

第二章　助詞の種類・用法

助詞には左の三種類がある。

一、第一類　體言の下に副うて、その體言の資格を示すもの

が　私が行きます。
　　お前が知つたことではない。

の　本が讀みたい。
　　雨の降る音がする。
　　手の指を傷つける。
　　光陰は矢のやうだ。

に　東京に着いた。
　　東に向かつて禮拜する。

木が石になる。
花見に行く。

を

窓を開ける。
空を飛ぶ。

と

私は竹子と申します。
妹と散歩に行きます。
講讀と文法(と)を習ふ。
蛹が蝶となる。

へ

東へ向かつて禮拜する。
東京へ着いた。

より

金は銀より貴い。

から

學校から歸る。
絹は蠶からとれる。

で

ペンで書く。
町で買つた。

二、第二類

用言(及び助動詞)の下に副うて接續の用をなすもの

て(で)

涙を流して喜んだ。
嶮しくて登れない。
喜んで歸つた。

ば

母が行けば、私も行かう。

と

家に歸ると日が暮れた。
燈が暗いと眼が疲れる。

から

母が行くから、私も行くのです。

ので

母が行くので、私も行くのです。

が

勉強したが失敗した。

のに

注意したのに失敗した。

けれど　失敗したけれど、挫けない。
けれども　失敗したけれども、挫けない。
ても（でも）　失敗しても、挫けまい。
失敗しても、挫けない。
ころんでも、泣くまい。
ころんでも、泣かない。
し　雨は降るし、風は吹くし、困つた。
ながら　歩きながら話す。

三、第三類　その他のもの

は　花子は雪子の姉です。
も　父も母も健在です。
ぞ　何ぞあげませう。
こそ　私こそ失禮しました。

か　それは新聞か雜誌か。
の　讀むのはやさしいが、書くのはむづかしい。
まで　町まで行かう。
風が烈しく、雨まで降る。
さへ　子供にさへ出來る。
でも　子供でも出來る。
ばかり　母のことばかり心配してゐる。
だけ　お前にだけ言つて置く。
しか　一つしか無い。
や　お花や。
な　親の恩を忘れるな。
よ　風はまだ吹くらしいよ。
ね　仲よくしませうね。

練習

次の文中から助詞を選び出し、その種類をいつてごらんなさい。

1 私は今日學校から歸るとすぐ、おとうさんのお手紙を持つて親戚へお使に行つて來ました。

2 弟子までが此の主人を見限つて、もう手助する人さへも無くなつた。

3 年こそちがへ、二人は同じ學問の道をたどつてゐた。

4 花も咲かず、鳥も鳴かないけれど、すべてのものの上に春がそつとしのび寄つてゐる。

5 雪は深さが二米もあらうか。村の家々は、わづかに屋根だけを見せて居る。電柱の背の低いことよ。

6 「おい誰も居ないか。」と父は叫んだ。

7 親切にしてやれば、馬ほどすなほで利口なものはめつたにないよ。

8 鳩より少し小さい鳥ですが、全體は綠色で口ばしと脚とは眞赤です。

9 たんぼに早稻の穗が出揃つて白く波打つのも秋らしい。

10 其の地下鐵道や高架鐵道までが、申し合せたやうに、南から北へ、北から南へと、わき目も振らず一直線に走つてゐるのですから、考へると少々をかしくさへなつて來ます。

復習

一、次の文を品詞に分類し、活用語についてはその活用の種類をいつてごらんなさい。

1 汽車でドイツの國內にはいつたのは朝まだほの暗い頃でしたが、もう沿道の田畑には農夫が鍬を振るつてをり、又工場といふ工場には盛に黑煙が上つてゐました。

2 甲板洗がすむと、「顏洗へ。」「煙草ぽん出せ。」の號令が下る。そこで始めて乘員は

顏を洗ふ。やがて上陸員が歸艦する。そこゝで朝の挨拶が言ひかはされる。

3 姉さん、元氣ですか。ハワイから出した手紙は、見たでせうね。あれからなほ航海を續けて、五日目の五月二十一日、サンフランシスコに着きました。

4 雨が止んで嬉しやと思ふ夜半から强い南風が吹き出して、花をいためつける。花の咲く頃は、何時も氣をもむことが多い。

二、次の文中の誤をお正しなさい。

1 十六のお前が、旅費も乏しい旅先で、親に別れては、さぞ心細くもあろふ、又つらひ事もあるであろふが、父の此の願だけは、しかと心にとめて置ゐて、必ず仕とげてもらひたひ。

2 お前のような弱虫には、ひよつとすると命を失うようなあぶなひ時でも、言出すことの出來なゐ程「いいえ」という言葉は言いにくひのだ。

文
主語
述語

第四篇　文

第一章　文の成分

一　私は女學生です。

二　冬が來ます。

三　一年は短い。

右の例のやうに、何が何だ「何がどうする」「何がどんなだ」といふやうな、一つのまとまつた思想を述べたものを文といふ。「私は」「冬が」「一年は」のやうに、何が」に當るものを主語といひ、「女學生です」「來ます」「短い」のやうに、主語について「何だ」「どうする」「どんなだ」と說明するものを述語といふ。

一　寒い冬が來ます。

修飾語
連體修飾語
連用修飾語
文の成分

二一年は實に短い。

右の例の「寒い」「實に」は、夫々「冬」といふ體言、「短い」といふ用言を「どんな」「どんなに」と修飾してゐるものである。これを修飾語といひ、體言を修飾するものを連體修飾語、用言を修飾するものを連用修飾語といふ。主語・述語・修飾語を文の成分といふ。文は此等の成分から組み立てられる。

主語の組織

主語は體言から成るのが普通であるが、他語が體言に準じて用ひられることもある。助詞を伴ふ場合が多い。

一 三學期が始まる。
二 新しいのが善い。
三 泣くのはいけない。

述語の組織

述語は用言から成るのが、普通であるが、他語が用言に準じて用ひられることもある。

一 冬が來る。
二 日が短い。
三 今日は暖かだ。
四 私の兄は軍人です。
五 これは私のか。

修飾語の組織

連體修飾語

形容詞・動詞・形容動詞の連體形又は體言に、のついたもの等から成る。

一　新しい自動車で平な街道を走る。
二　旅行する計畫があります。
三　亞歐連絡飛行の成功が傳へられた。

連用修飾語

副詞、形容詞の連用形、又は此等に準ずるものから成る。

一　かなり寒い。
二　早く行きませう。
三　花のやうに美しい。

連用修飾語の中には體言から成るものがある。多くは助詞を伴ふ。

一　東京は仙臺より暖い。
二　兩親と旅行する。
三　湯が水になる。

四　妹に人形を與へる。

體言から成る連用修飾語を補語といふ。用言の意味の不足を補ふものである。

獨立語

一　松子や、お前は知つてゐますか。
二　いいえ、私は　存じません。
三　まあ　さうですか。
四　日は　暮れた。しかし、父は　歸つて來ない。

右の例のやうに、呼びかけ・應答・感動・接續等をあらはすもので、他の成分から獨立したものを獨立語といふ。これも文の成分である。

練習

次の文を其の成分に分解し、修飾語はその種類をいつてごらん

なさい。

1 にいさん、うちの田植はすつかりすみました。
2 船は先づ海から廣い掘割にはいる。
3 ゴムの用途は、年毎に益〻廣くなる。
4 我々は此のつめたいのを二三杯つづけ樣に飲んだ。
5 おとうさん、今度役場の隣に立派な建物が出來ましたね。
6 地下水のしづくが、四方から雨のやうに落ちて來る。
7 ヨーロッパの事件も一兩日中に日本の讀者に報道せられる。
8 麗かな春の日ざしも隣の屋根に傾いた。
9 健全な精神は健全な身體に宿る。
10 古の武士は命を鴻毛よりも輕んじた。
11 子馬は、ゆつくりゆつくり水を飲む。
12 雀の子、そこのけそこのけお馬が通る。

第二章　文の成分の位置と省略

文の成分の正常の位置

主語——述語

一　花が　咲く。
二　桃や櫻が　咲く。
三　群衆は　喜び叫ぶ。

右の例のやうに、主語は文の初に、述語は終にくるのが普通である。

修飾語——被修飾語

一　裏庭の水仙が　綺麗に咲いた。
二　椿が　神社の森に咲く。
三　生徒が　鉛筆で　繪を書く。

倒置

省略

右の例のやうに、修飾語は被修飾語の上に來る。一つの被修飾語に對し二つ以上の修飾語のある場合には、その順序は定まつてゐない。

獨立語

一 おや、プロペラの音が聞える。

二 花子や、お前もお出で。

右の例のやうに、獨立語は文全體の上に來るのが普通である。

文の成分の倒置と省略

倒置

一 出た出た、月が。

二 答辭は　私が　讀みました。

省略

一 よく（雨が）降るね。

二（あなたは）どうか（私を）お許し下さい。

三 千里の道も　一歩から。（始まる）

右の例のやうに、文は語勢を強めたり、調子を調へたりするために、その成分を倒置したり、省略したりすることがある。

使に行つておいで。

右の例のやうに、命令をあらはす文は主語のないのが普通である。

練習

一、次の文の各成分を、正常の位置にお直しなさい。

1 清い月の光がさし込んだ、まるで流れるやうに。

2 一體どうしたんです、あなたは。

3 誰だ、仕事臺の上をかき廻したのは。

4 いたる所に椰子の木立がある。
5 出勤を急ぐ人たちが通る、勢よくステッキを振り振り、靴音を立てて。
6 橋の下を、鐘を鳴らして貨物列車が行く。

二、次の文の略されてゐる成分を補つてごらんなさい。

1 暖かい晩だ。遠い汽笛しめやかに下駄の音どこかでどつと笑ひ聲。
2 先生がどうしてこちらへ。
3 にいさん、まあ何といふよい曲なんでせう。私にはもうとてもひけません。
4 それでは此の月の光を題に一曲。
5 おゝ降つたは〳〵。世に榮えてゐる人が眺めたら、さぞ面白い事であらう。
6 一寸の蟲にも五分の魂。

敬語法

一 あの人がさう言つた。
二 あの人がさう言ひました。
三 あのお方がさう仰せられました。
四 むすめがさう申しました。

右の例の(一)は普通の言ひ方で、(二)は丁寧な言ひ方である。(三)(四)には尊敬又は謙遜の意味が含まれてゐる。(一)のやうな言ひ方を常語法といひ、(二)(三)(四)のやうな言ひ方を敬語法といふ。敬語法には右の(二)の例のやうに、助動詞ますを副へ丁寧に言ふ場合と、(三)の例のやうに、尊敬の語を使つて敬意を表はす場合と、(四)の例のやうに謙遜の語を使つて敬意を表はす場合とある。

尊敬の語を使ふ場合

(一)體言

(イ)語そのものが敬意を含む場合

閣下　あなた　令孃

(ロ)接頭語・接尾語を副へて敬意を表はす場合

御兩親　お屋敷　おみ足　おかあ樣　伯父さん

(二)用言

(イ)語そのものが敬意を含む場合

お父樣は書齋にいらつしやる。

先生が「明日は休みだ」とおつしやつた。

(ロ)助動詞又は準助動詞を副へて敬意を表はす場合

叔父さんが東京から歸られる。

叔母さんが驛まで迎へに出られる。

やがて御出になるだらう。

早く御全快なさるとよいが。

「になる」「なさる」等の準助動詞を使ふ場合は上の動詞に御(お・ご)といふ接頭語を副へるのが普通である。

謙遜の語を使ふ場合

(一)體言　わたくし　家内

(二)用言

(イ)語そのものが謙遜の意を含む場合

私が明日參ります。

私から申上げませう。

(ロ)準助動詞を副へて謙遜の意を表はす場合

女中にお供致させます。

私がお教へ申しませう。

右は敬語法の數例に過ぎないので、實際にはこれ等の用法が色々に組合せられて使はれるし、又言葉によつて敬意の程度が色々である。殊に　皇室に關しては、特定の敬語の使はれる場合が多いから特に注意を要する。

國語と國民性とは密接な關係のあるものであるが、我が國語に特に敬語法が發達してゐることも、國民性の然らしむる處であつて、決して之を忽にしてはならぬ。

練習

次の文の中の敬語法に誤りがあつたらお直しなさい。

1 あのお方はもう歸りました。

2 御父様はうちにゐますか。

3 先生。私のお父様は今日は御留守です。

新制女子國文典 初年級用 終

語の分類表

- 語
  - 自立語
    - 活用しない語
      - 主語となり得るもの……名詞・數詞・代名詞 ｝體言
      - 主語となり得ないもの……副詞・接續詞・感動詞
    - 活用する語——述語となり得るもの……動詞・形容詞・形容動詞 ｝用言
  - 附屬語
    - 活用しない語……助詞
    - 活用する語……助動詞
    - ｝助辭

動詞活用表

種類	語幹／語尾	未然	連用	終止	連體	假定	命令
四段活用 カ行	書	か	き	く	く	け	け
四段活用 ガ行	漕	が	ぎ	ぐ	ぐ	げ	げ
四段活用 サ行	押	さ	し	す	す	せ	せ
四段活用 タ行	打	た	ち	つ	つ	て	て
四段活用 ナ行	死	な	に	ぬ	ぬ	ね	ね
四段活用 ハ行	言	は	ひ	ふ	ふ	へ	へ
四段活用 バ行	學	ば	び	ぶ	ぶ	べ	べ
四段活用 マ行	讀	ま	み	む	む	め	め
四段活用 ラ行	登	ら	り	る	る	れ	れ
四段活用 ラ行	蹴	ら	り	る	る	れ	れ
四段活用 ラ行	有	ら	り	る	る	れ	れ
上一段活用 カ行	着	き	き	きる	きる	きれ	きよ
上一段活用 ガ行	過	ぎ	ぎ	ぎる	ぎる	ぎれ	ぎよ
上一段活用 タ行	落	ち	ち	ちる	ちる	ちれ	ちよ
上一段活用 ダ行	恥	ぢ	ぢ	ぢる	ぢる	ぢれ	ぢよ
上一段活用 ナ行	煮	に	に	にる	にる	にれ	によ
上一段活用 ハ行	干	ひ	ひ	ひる	ひる	ひれ	ひよ
上一段活用 バ行	亡	び	び	びる	びる	びれ	びよ
上一段活用 マ行	試	み	み	みる	みる	みれ	みよ
上一段活用 マ行	見	み	み	みる	みる	みれ	みよ
上一段活用 ヤ行	報	い	い	いる	いる	いれ	いよ
上一段活用 ラ行	射	い	り	いる	いる	いれ	いよ
上一段活用 ワ行	懲	り	り	りる	りる	りれ	りよ
上一段活用 ワ行	居	ゐ	ゐ	ゐる	ゐる	ゐれ	ゐよ
下一段活用 ア行	得	え	え	える	える	えれ	えよ
下一段活用 カ行	受	け	け	ける	ける	けれ	けよ
下一段活用 ガ行	告	げ	げ	げる	げる	げれ	げよ
下一段活用 サ行	寄	せ	せ	せる	せる	せれ	せよ
下一段活用 ザ行	交	ぜ	ぜ	ぜる	ぜる	ぜれ	ぜよ
下一段活用 タ行	棄	て	て	てる	てる	てれ	てよ
下一段活用 ダ行	出	で	で	でる	でる	でれ	でよ
下一段活用 ナ行	尋	ね	ね	ねる	ねる	ねれ	ねよ
下一段活用 ハ行	教	へ	へ	へる	へる	へれ	へよ
下一段活用 バ行	比	べ	べ	べる	べる	べれ	べよ
下一段活用 マ行	貰	め	め	める	める	めれ	めよ
下一段活用 ヤ行	消	え	え	える	える	えれ	えよ
下一段活用 ラ行	枯	れ	れ	れる	れる	れれ	れよ
下一段活用 ワ行	植	ゑ	ゑ	ゑる	ゑる	ゑれ	ゑよ
カ行變格	來	こ	き	くる	くる	くれ	こい
サ行變格	爲	せ	し	する	する	すれ	せよ しろ

形容詞活用表

種類	語幹／語尾	未然	連用	終止	連體	假定	命令
ク活用	高		く	い	い	けれ	
シク活用	美	しく		しい	しい	しけれ	

形容動詞活用表

語幹／語尾	未然	連用	終止	連體	假定	命令
高	から	かつ				
靜か	だら でせ	だつ でし	だす で	な	なら	

助動詞活用表

種類	語幹	未然	連用	終止	連體	假定	命令
受身	れる	られ	られ	られる	られる	られれ	られよ られろ
可能	れる	られ	られ	られる	られる	られれ	
使役	せる	させ	させ	させる	させる	させれ	させよ させろ
尊敬	れる	られ	られ	られる	られる	られれ	
豫想	う	よう		よう			
打消	ぬ(ん)	ない	なく	ない	ない	なけれ	
時	た	たら	たり	た	た	たら	
希望	たい	たがる	たがり	たい	たい	たがれ	
丁寧	ます	ませ	まし	ます	ます	ますれ	ませ まし
推量	らしい	まい	らしく	らしい	らしい		
指定	だ	です	だつ でし	だす で	な	なら	

昭和十二年七月廿五日印刷
昭和十二年七月三十日發行
昭和十二年十一月十五日訂正再版印刷
昭和十二年十一月二十日訂正再版發行

新制女子國文典初年級用
定價金四拾壹錢

著作者　東條操

發行者　東京市麹町區飯田町二丁目二十番地
中等學校教科書株式會社
代表者　山本慶治

印刷者　京都市下京區坊城通五條下ル
久保田光好

發行所　東京市麹町區飯田町二丁目二十番地
中等學校教科書株式會社
日本出版文化協會會員番號　一一七五二二

（略名）星野東條女文典

日本出版配給株式會社　元配給
東京市神田淡路町二ノ九

本科一年二組

金

文庫
37
050

広島大学図書
2000046050

本科一年二組

文庫
37
050
広島大学図書
2000046050